Vol.3

S・O・S 認定活動報告集

Students' Organization for Self-help and Offical Support

一緒にやってみんかえ?

活動メンバー募集中!!

高知大学では、
学生同士の相互扶助（ピア・サポート）を中心に、
学内の活性化、地域貢献に積極的に取り組む
学生団体を公的に支援しています。

平成23年度　高知大学認定団体

- 献血促進プロジェクト　いのちのリボン
- 高知大学国際協力団体すきっぷ
- Welcome to まうんてん　あぐりぃ～ず
- こらパ～祭り実行委員会
- ちょっとオイシイ高知大ライフJam Boshipan
- 学生活動支援　さぽると
- 森の未来に出会う旅　学生団体FAN
- 高知長寿いきいきプロジェクト　百遊会
- 高知子ども守り隊　守るんジャー

高知大学
Kochi University

Contents

02 巻頭のことば ── S・O・Sが切り拓く大学教育の新たな地平

03 S・O・S認定活動を知っていますか？

05 S・O・Sに寄せて

平成23年度　S・O・S認定活動報告

06 献血促進プロジェクト　いのちのリボン

07 高知大学国際協力団体すきっぷ

08 Welcome to まうんてん　あぐりぃ～ず

09 こらパ～祭り実行委員会

10 ちょっとオイシイ高知大ライフJam Boshipan

11 学生活動支援　さぽると

12 高知長寿いきいきプロジェクト　百遊会

13 高知子ども守り隊　守るんジャー

14 総合教育センター修学支援部門の取り組み

巻頭のことば

S・O・Sが切り拓く大学教育の新たな地平

高知大学総合教育センター長
修学支援部門長
理学部　教授
吉倉紳一

今、私の手元にS・O・S認定活動への応募を学生に呼びかけるポスターがあります。そこには「学生による自律的・組織的活動プロジェクト募集、がんばる学生を応援します」と記されています。このキャッチコピーがS・O・Sの企図を端的に表しています。S・O・SとはStudents' Organization for Self-help and Official Supportの略称で、学生の自主的な活動組織であり、それを支援する教職員の組織でもあります。やる気があり、がんばる学生に活躍の場を与え、その活動を総合教育センターの修学支援部門に設置されたS・O・S支援部会の教員や、学生支援課の職員が指導・助言すると共に、財政的にも支援するものです。それにより、学生の自律性や社会性を涵養することを目的としています。

S・O・Sの活動内容は学生のためのピア・サポートを目的とした活動と、地域活動・地域貢献を目的とした活動に大別されます。修学支援部門では前者に対しては「ピア・サポーター養成講座」を、後者に対しては「ボランティア養成講座」を開講し、活動の質の向上と人材育成に取り組んできました。その結果、S・O・S支援部会の審査によってS・O・Sと認定された団体数は年々増加して、2011年度は9団体に達しました。

S・O・Sの活動は社会的にも高い評価を得て、「高知子ども守り隊守るんジャー」のように2010年度SYDボランティア文部科学大臣賞を受賞する団体もでてきました。また、S・O・Sは正課外の教育活動の新たなスタイルとして他の大学からも大いに注目されています。大学には問題を発見し解決する力、他者と協働して物事に当たる力などを備えた人材の育成が求められていますが、ともすればこれらはお題目だけに終わりがちです。しかし、S・O・Sに参加している学生はさまざまな活動を通じて、これらの力を着実に身につけていることが本報告書の端々からうかがえます。S・O・Sは大学における上記の教育目的を達成する教育の場や方法として、きわめて有効に機能していると確信できます。

今後は学生・教職員が不即不離の関係を保ちつつ、参加団体の数を増やすことはもとより、これまでの活動内容の検証と、それに基づく改善をおこない、高知大学で産声を上げ、ここまで成長したS・O・Sをより大きく育て上げなければなりません。これまで以上の学生諸君の奮起と教職員の熱意溢れる支援を期して、巻頭のことばといたします。

S・O・S認定活動を知っていますか？

総合教育センター修学支援部門
S・O・S支援部会長
准教授　玉里恵美子

▶ S・O・S認定活動とは

高知大学S・O・S認定活動をご存知ですか。S・O・Sとは、Students' Organization for Self-help and Official Supportのことで、本学の学生相互支援（ピア・サポート）活動組織を指しています。また、そのような活動を大学として公的に支援していこうとするものです。

高知大学におけるS・O・S活動の歴史は古く、1997年度に導入された新入生のパソコン必携がきっかけとなります。当時はまだパソコンが普及しておらず、パソコンの知識を有する学生が、パソコンの扱いになれていない学生を教えるというピア・サポート組織が立ち上がりました。2000年10月には「学生による高度情報化支援組織」が設立され、S・O・Sという名称のもと、大学が学生の活動を支援していくことになります。学生による支援の輪が広がり、2003年度には「国際交流協力セクション」が増設されました。また、2004年度より高知大学教育創造センターがS・O・Sを担当し、「学生相互支援企画」および「プレゼンフェスタ」を通じてS・O・S活動の再構築を行ってきました。そして、学生による活動の多様性に対応すべく、2006年度からは活動の目的を「学生ピア・サポート」と「地域活動・地域貢献」の２つの領域と設定し、学生の申請による支援を開始し、より学生の自主性・自律性を涵養できる体制を整えました。2009年度より総合教育センター留学生・修学支援部門へ、2011年度より修学支援部門が担当しています。

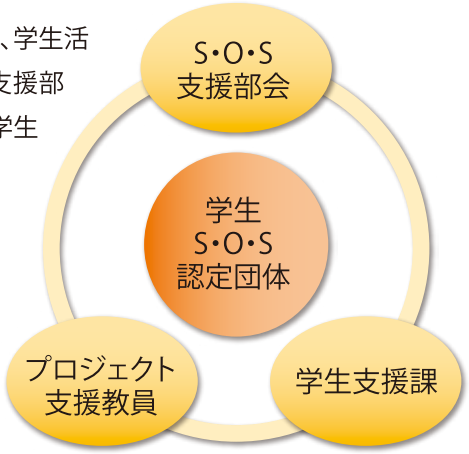
過去の取り組み：
防災すけっと隊の東北地方太平洋沖地震義援金募金活動
HPアドレス http://kochidisaster.web.fc2.com/

過去の取り組み：就活会の就活カフェ

▶ S・O・S認定活動の組織

S・O・S認定活動の運営はS・O・S支援部会が行っており、現在は4名の教員で構成しています。S・O・S支援部会の活動目的は、①学生による多種多様なピア・サポート活動の発掘（募集）と拡大、②相互支援活動組織である各プロジェクトチームの支援の充実、③新しいS・O・S活動及びS・O・S支援活動システムの定着と検証、です。毎年春には、学生からの申請に基づき、その審査および採択の可否決定を行っています。また、年に３回開催される活動報告会（リーダー会議）ではS・O・S支援部会から活動の指針となるアドバイスがなされ、学生にとってブラッシュアップの場となっています。

さらに、各々のプロジェクト（学生団体）には、1名のプロジェクト支援教員がいて、学生活動の指導・サポートにあたります。学生の主体的な活動を尊重しながら、S・O・S支援部会、プロジェクト支援教員、学生支援課がそれぞれの立場からアドバイスを行い、学生の自律的な能力の形成に寄与することをミッションとしています。



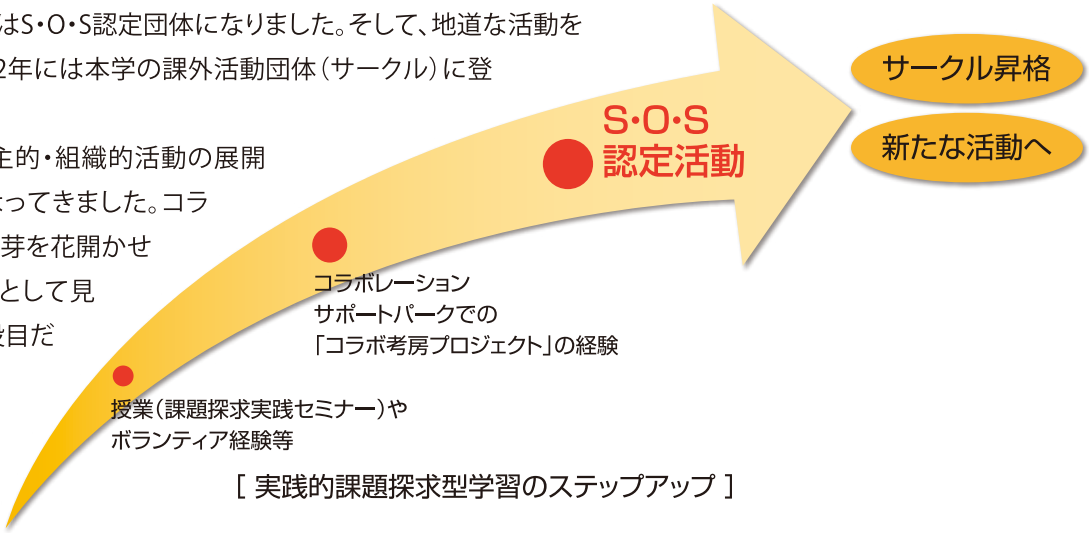
S・O・S支援部会		
玉里恵美子	部会長	総合教育センター修学支援部門 准教授
辻田　宏	委　員	共通教育実施機構／総合教育センター大学教育創造部門 教授
池田啓実	委　員	人文学部／総合教育センターキャリア形成部門　教授
小島郷子	委　員	教育学部 教授

▶ 高知大学における学生の自主的・組織的活動の流れ

本学では実践的課題探求型教育に力を入れて取り組んでいます。共通教育科目の課題探求実践セミナーを通じて見たり・聞いたり・体験したりしたことをきっかけに、多くの学生が「自分も何かをしたい」と能動的な活動をするようになります。朝倉キャンパスの「コラボレーション・サポート・パーク（通称　コラパ～）」では、主に１～２年次生に対して「コラボ考房プロジェクト」を実施しており、学生のやる気と企画を支援しています。

本学には2008年に発足した「高知大学防災すけっと隊」という学生団体があります。防災すけっと隊の活動内容は、南海地震に直面する高知県において次世代を担う小・中学生や高校生に対して防災教育を行ったり、若い人の力が不足している地域での防災活動を行ったりすることです。防災すけっと隊は2009年にコラボ考房の支援を受け、2010年にはS・O・S認定団体になりました。そして、地道な活動を継続発展させながら2012年には本学の課外活動団体（サークル）に登録されます。

このように、学生の自主的・組織的活動の展開の流れが少しずつ形になってきました。コラボ考房で生まれた活動の芽を花開かせるため、S・O・S認定活動として見守っていくことも大切な役目だと思います。



［ 実践的課題探求型学習のステップアップ ］

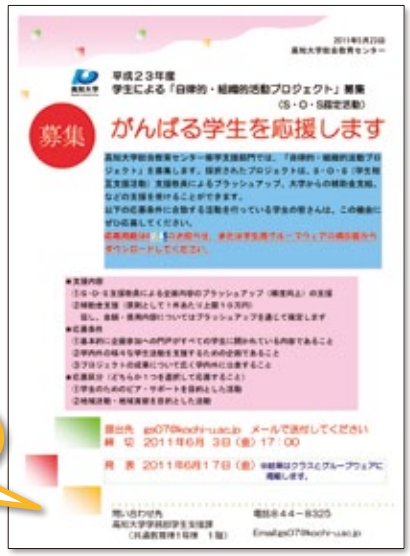
▶ S・O・S認定団体になるためには

学生団体がS・O・Sとして認定されるためには、学生の申請に基づきS・O・S支援部会の審査を経て、採択されなくてはなりません。S・O・Sに申請しようとする団体は、①すべての学生に対して門戸を開き、②その活動に公共性があり、③学生が相互に支援する活動である必要があり、本学の公的組織S・O・Sとして認定されれば、一定の財政的な支援やアドバイスが受けられる仕組みになっています。また活動の領域は、①学生のためのピア・サポートを目的とした活動、②地域活動・地域貢献を目的とした活動、の２つに設定しています。

リーダー会議の様子

本書は2011年度に採択された9団体の活動報告書です（掲載は8団体になります）。また、学内外の多くの方々にS・O・S認定活動を知ってもらうために、S・O・S支援部会やプロジェクト支援教員のメッセージも掲載した「特別号」です。学生のみなさん、S・O・S認定団体に入って一緒に活動してみませんか？　また、自分たちでプロジェクトチームを作ってS・O・Sに挑戦してみませんか？　毎年、春（５～６月頃）に公募があります。構内の掲示板やグループウェアを良く見ておいてください。

S・O・S活動に関する相談は一年中受け付けています。


平成２３年度
学生による「自律的・組織的活動プロジェクト」募集
（S・O・S認定活動）
募集
がんばる学生を応援します

S・O・Sに寄せて

地味で地道な活動がS・O・Sの神髄

人文学部 教授 池田啓実

10年が経過したS・O・S設置の契機は1997年度に始まった全新入生のパソコン必携化でした。まだまだパソコンの活用が日常的ではなかった時代、円滑な必携化には、学生による学生のための自律的な支援が必要と考え組織化したのがS・O・Sです。その後、ミッションは、現在のような学生サポートや社会的課題の解決を目指す学生グループの支援へと大きく変貌しましたが、「地味で地道な活動」はこれまで一貫して重視してきています。

実は、この視点は実際の仕事においても重要です。新日鉄ソリューションズ（株）人事部部長にして本学客員教授でもある中澤二朗氏は、「しごと」を性格　（壁と穴）と種類（日常と非日常）で観ると、その８割は繰り返し作業（日常）であり業務埋没的（しごと壁）なもの。しかしかたや、そうした仕事こそが社会を下支えし、人はそれに正対することを通して他者の「信頼」を得る、あるいは「問題と変化」への対応力を磨き、「まだ見ぬ自分」にも会える（成長）と言うのです。

S・O・S活動は、社会的課題の解決、企画立案力などに目が行きがちですが、中澤氏が指摘するように、質の高い他者に必要とされる活動であるには、地味で地道な活動を通して得た「信頼」が基盤になければなりません。S・O・Sスタッフはむろんのこと、これに関心のある学生の皆さんにも、ぜひこの点を意識してもらえればと思います。

S・O・Sの理念

共通教育実施機構 教授 辻田　宏

2005年度までのS・O・S活動は、情報セクション及び国際セクションに特化していましたが、2006年度からはその区分をなくして、学生の申請に基づく多種多様な学生によるピア・サポート活動をS・O・Sとして幅広く認定し支援を行うことになり現在に至っています。その際の制度設計には３つの基本原則がありました。

まずその一つは、「公共性の担保」ということです。当該活動は学内すべての学生に開放され、合理的な理由のない限り、参加を希望する学生を拒否できないというものです。二つ目は、「貢献性の追求」です。活動（プロジェクト）内容は、大学（学生）や地域（社会）をより良くしていくという側面を有している必要があります。三つ目は、「自律性の獲得」です。活動（プロジェクト）に参画する学生は、ピア・サポート活動及び人や社会との協働を通じて自らの自律性や社会性の涵養を図る努力をしなければなりません。

あれから、5年が経過しました。この間素晴らしい取組みもなされていますが、改めてこの3つの原則に基づいて検証を行う時期に来ているように思います。もちろん、それによってはこれらの原則に見直しも必要になるかも知れません。

学生の主体的な活動の支援に関わって

教育学部 教授 小島郷子

S・O・Sの活動に関わるようになって10年以上が経ちます。パソコン必携がスタート直後の情報セクションから関わっていましたが、当時は学生の支援というより、学生が正課外活動に自主的に関わる中で、何を学び何が得られるのかを、学生から学んでいたように思います。学生の主体的な活動はコミュニケーション力や企画力の育成に役立つことはもとより、地域をフィールドとすることから、地域貢献の一端も担っていることを学びました。地域をフィールドとした活動を展開する場合、学生や大学側だけにメリットがあるのではなく、両者がWin-Winの関係でありたいと思います。

私は教員養成に携わっていますが、大学4年間で実践的指導力をもった教員を養成して、教育現場に出すことが求められています。教員をめざす学生にとって、学習チューターなどのボランティア活動が教員に必要な実践力の育成に役立つことは間違いありませんが、そのことが子ども達のためになっていることを願っています。

高知大学のS・O・Sの取り組みは広く評価されていると思います。これからも、正課外の学習が、学生にとって価値あるものになるように、支援していきたいと思います。

S・O・Sに期待すること

総合教育センター 大学教育創造部門
教授 塩崎俊彦

S・O・Sの報告会などで学生の生の話を聞くことがあります。立派な成果を挙げてそれを報告している団体もありますが、なかなか自分たちの思った通りにことが運ばず、現実的な問題に悩み葛藤しながら、気持ちが折れそうになっていることを率直に打ち明ける学生たちもいます。

耐え切れず活動から遠ざかっていく者もいますが、どうしていいかわからないけど、とにかく続けていかなければならない、と考えて頑張っている学生も多くいます。そうした学生たちにとって、続けていこうとする力の源は、より深く社会とつながっていることにあるような気がします。「引くに引けなくなった」といえば消極的に聞こえるかもしれませんが、その気持ちが彼らを支えているのではないでしょうか。そして、それが社会とつながることの第一歩であると思います。そうした経験を数多く積み重ねていくことができるのは、S・O・Sの大きな特徴ではないでしょうか。

もうひとつ。S・O・Sには学生間のピア・サポートという性格があります。S・O・Sで活躍している学生のみなさんには、同じような悩みを抱えるまわりの学生たちのよき相談相手として、自分たちの経験をもとに彼らをサポートしていって欲しいものです。多くの仲間を巻き込みながら、S・O・Sの各団体がさらに力にあふれた活躍を続けることを祈っています。

平成23年度 S・O・S認定活動報告

学生パワーで若者の献血離れを食い止めろ!

▶ 献血促進プロジェクト いのちのリボン

▶ 活動目的

いのちのリボンは学内の献血促進をするための団体です。現在献血は若年層の献血離れという問題を抱えています。そのため私たちは高知大学生に的を絞って、献血の必要性や献血の正確な情報を伝えることを目的として日々活動しています。高知大学生に献血の必要性を広め、大学生の意識向上をし、血液が不足すると予想される未来において少しでも役に立てればと思っています。

繁華街での啓発活動の様子

▶ 今年度の活動

おもな活動内容は、学内に献血カーが来たときに献血者を呼び込むお手伝いをすることです。また、立て看板を立てたり、校内にポスターを貼るなどして献血カー来校日時の告知をしています。献血情報誌の配布なども行っています。また、県内の学生が主催している献血イベントの告知なども行っています。主催である高知県献血ボランティア団体のクロス倶楽部とも連携を取り、高知県内3大学の学生で交流を深めています。献血とは少し離れますが、他に東北大震災の被災地の子供たちにノートをプレゼントする企画にも団体で参加しました。

最初は発足メンバー3人という少数で始めた活動でしたが、現在は発足メンバーの4回生3人に加え、2回生のメンバーが5人も増え、現在８人でわきあいあいと活動しています。

手作りの立て看板

時には着ぐるみを着て活動することも

▶ これからの活動

今までの活動に加え、クロス倶楽部や東北大震災被災地へノートを送る活動のように、他のボランティア団体とも連携を取り、お互い助け合って活動を盛り上げていきたいと考えています。

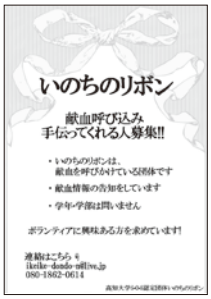
今年度は、献血ボランティアを学生が推進するという意味に気付かされる一年でした。今までポスターやビラを配布することに重きを置いていた私たちですが、最近は友人から友人へ、知人から知人へと献血の大切さを口コミで広げる力の大きさに気付いたのです。団体を立ち上げて2年と少しがたちました。立ち上げ当初に献血に誘っても献血に来てくれなかった友人は沢山います。今では、献血に行くようになった友人、友人のつながりで献血を手伝いに来てくれるサークルなどができました。学生が学生に向けて献血の必要性を発信するからこそ発揮できる力があることを学びました。これからも、学生同士のつながりを大事にし、若い世代の献血率上昇を目指していきたいと考えています。

一言コメント

「献血したよ」の友達の声がやりがいへとつながっています。

人文学部 准教授 円谷友英

献血促進のためのポスター貼りやビラ配りといったマス広告からスタートしましたが、口コミによる広がりの重要性にも気が付いて、地味で地道な活動にも励んでいます。近頃は、友人づてに「献血したよ」といった声が届くようになり、献血者の増加を少しだけ実感できるようになりました。



フェアトレードを通じて高知から世界の貧困問題にアプローチ

▶ 高知大学国際協力団体　すきっぷ

▶ 活動目的

「すきっぷ」は、フェアトレードを通して世界の貧困解決に貢献し、国際協力の知識や情報を発信して多くの人に国際問題について知ってもらうための団体です。

フェアトレード商品の販売や講演会を行うことで、国際問題について高知大学内外に発信しています。フェアトレードとは、開発途上国の商品を労働や環境に見合った“フェア”な価格で購入し取引することで、立場の弱い労働者の生活改善を目指す貿易です。現在「すきっぷ」では、マラウィ（アフリカ南東部の国）のエイズ孤児たちが作ったビーズバッジを取り扱っており、総勢22名（３年生４名、２年生10名、１年生８名）で活動しています。（2012年2月現在）

▶ 今年度の活動

主な活動として高知県内でのフェアトレード商品の販売や、団体発足当初から行っているエイズ講演会の主催を行いました。今年からは、鏡川町で月に一度開かれているマーケット「みどりのメルカード」に出店を始めました。

2008年度から毎年「すきっぷ」が主催しているエイズ講演会は、今年度で４回目の開催となりました。今年度は、セネガルで青年海外協力隊としてエイズ患者たちを支援していた田上陽子氏を講師にお迎えし、講演後にはクイズやワークショップを交え、過去にない参加型のイベントとなりました。

また、フェアトレードコーヒーの試飲会や、世界の貧困の現状を伝えるパネル展を学内向けに行いました。試飲会ではアンケート調査を行い、高知大学生のフェアトレードに対する意識や、コーヒーに対する嗜好を調査しました。

「すきっぷ」では週２日のミーティングの他に、月に１度、全体会議を設けて重要な決定や団体の方向性について討論を行い、メンバー内の意識向上を図っています。

▶ これからの活動

現在、日本においてフェアトレードの認知度は低く、活動も活発ではないのが現状です。そこで「すきっぷ」では、高知大学を中心にフェアトレードの啓発を続けていきます。そしてより多くの高知大生にフェアトレードを知ってもらえるよう頑張ります。

後に、「すきっぷ」は今後もフェアトレードを行いながら、様々な国際協力の方法を試み、世界の貧困解決に少しでも貢献できるよう活動を進めて行きます。

フェアトレードコーヒー試飲会

HPアドレス
http://www.geocities.jp/hop_skip_jump11/index.html

一言コメント

**すきっぷは、
社会をより良くするため、
真剣に活動をしているグループです。**

人文学部　准教授　中西三紀

すきっぷは、様々な問題が渦巻く現代社会において私たち一人一人が何をどう考え、どうすれば社会をより良くしていけるのかを真剣に探求しているグループです。例えば、フェアトレードに携わることを通じて、消費者である私たちに何ができるのかを考え実践しています。また、近年はフェアトレードのみならずAIDS問題へとその関心の幅を広げ、毎年、専門家の先生を招いて、AIDSに関する正しい知識を身につけるための講演会も開催しています。

団体内勉強会の様子

地域と大学の架け橋になることを目指し、学生の目線で地域活性化を図る!

▶ Welcome to まうんてん あぐりぃ～ず

▶ 活動目的

あぐりぃ～ずは平成22年度5月コラボ考房の支援の下、“農業のイメージを良くしたい!!”という目標で活動を開始。支援教員から、いの町是友地区を紹介していただき本格始動しました。次第に、活動目標は“農業のイメージアップ”から、“地域と大学との懸け橋になり、地域の方と一緒に地域を活発にする!”に変化していきました。

是友演芸会の様子

▶ 今年度の活動

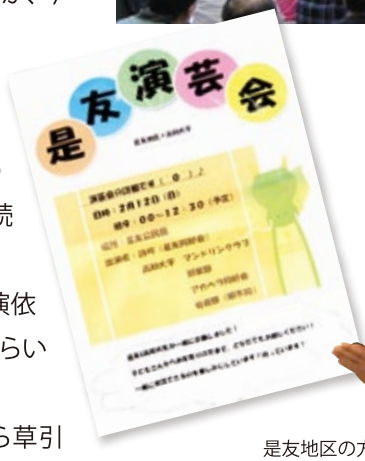
チームの目標が確立したところでコラボ考房の支援が終わりましたが、今年度のS･O･S認定を受けることができ、新メンバーの1年生も3名加わって、6人で活動し始めました。

是友地区では、2010年度秋から取り掛かり始めた宇治川沿いの花街道作りをはじめ、7月に行われる八坂神社の夏祭りなど、地域のリーダーと一緒に住民を巻き込んで是友地区を活発にする活動を続けてきました。

７月23日に行った八坂神社の夏祭りでは高知大学の奇術部に出演依頼をして、地域の皆さんの前でマジックとジャグリングを披露してもらいました。

花街道作りでは、地域のリーダーや住民と共に河川敷を開墾から草引き、シバザクラの苗植えなど定期的な作業を行ってきました。毎回の作業の後は、公民館にて“お疲れ様会”が開かれ、防災訓練を兼ねた炊き出しを囲んで交流を深めました。

また、2月12日にあぐりぃ～ずで企画立案した是友地区と高知大学のマッチング演芸会“是友地区 第1回 演芸会”を催しました。高知大学から、アカペラ同好会、奇術部、邦楽部、マンドリンクラブが出演、地区の文化サークルとして詩吟を岳風会是友支部のみなさんにも出演していただきました。大学と地区の交流が実現し、是友公民館に大学生と地域の方、およそ60人が集まってくれました。地域の方からは「若者に元気をもらい、いろんな文化活動にふれあえて楽しかった」「生演奏で感動した」「来年も継続して行ってほしい」と感想をいただき、演芸会は大成功しました。



是友地区の方々にも喜んでいただきました!

▶ これからの活動

今後のあぐりぃ～ずの活動としては、新1年生をメンバーに勧誘して、継続的に地域と関わる仕組みを確立すること、地区の方の顔と名前がわかり合える仲になること、小・中学生の子どもたちとの交流を深めていきたいと思います。2012年はもっと定期的に活動を行えるよう努めていきます。

応援メッセージ

高知LOVEの気持ちが企画力と実行力につながっています。

総合教育センター 准教授 玉里恵美子

企画力と実行力の「あぐりぃ～ず」。いの町是友地区と協働して、花街道作りに汗を流したり、高知大学音楽･演芸系サークルを動員した是友演芸会のプロデュースに知恵を絞っています。地域が大好き、そして高知大学が大好き。その気持ちが、演芸会の成功を導きました。また、学内の花壇にお花を植えるボランティア活動もしています。椰子の木の下の可愛い花壇にも注目してくださいね。

大学構内での花植え活動

まつりを通じて地域と学生をつなぐ！高知を楽しみ高知の元気をつくる

▶ こらパ～祭り　こらパ～祭り実行委員会

▶ 活動目的

私たち「こらパ～」まつり実行委員会は、地域と学生をつなげる役割を担っている団体です。高知県の地域に興味があっても、実際どのようにつながればいいか分からない、というように熱意はあってもつながり方が分からず困っている学生が存在すると考えられます。また、学生の力が欲しいと思っている地域の方も存在するのではないでしょうか。このような双方の悩みを解決するのが、私たち「こらパ～」まつり実行委員会です。コラボレーション・サポート・パークの略称である「こらパ～」とは、地域と学生の協働活動を支援する機関を指し、わたしたち実行委員会は「まつり」を開催することで、普段ならば関わることが少ない学生と地域の方々との交流する機会を設け、学生と地域の方々との距離を縮めることをモットーに活動しています。

また、地域と学生がつながることによって、学生にとっては新たな価値観に触れることで自分自身の成長につながり、また地域にとっても新たな力が加わることが期待されます。

「こらパ～」まつりで、「宇佐大鍋まつり」の皆様からお借りした大鍋を囲んで

▶ メンバー構成

現在、計14名で活動しています。高知県内の学生だけでなく、高知県外の実行委員も在籍しており、半分が県外生となっています。高知県出身の学生が見つけられないような視点で物事をとらえ、新たな高知の魅力も発掘する力となっています。ちなみに、男性実行委員が少ないので、大募集中です。

▶ 今年度の活動

まず、わたしたちの活動自体を知ってもらい、また地域の情報も知ってもらおうという目的のもと月に１回「こまつり」を開催してきました。「こまつり」では地域の食材を使った鍋を学内にて無料で配布しており、その際に使用する食材は日頃からの地域の方とのつながりをもとに提供していただいています。そして、「こまつり」を踏まえたうえでの「おおまつり」を年に１回開催しています。ここでは毎回メインイベントを考え、2011年11月に行った「おおまつり」では宇佐の大鍋をお借りし、500人分の鍋をふるまいました。

「こまつり」や「おおまつり」の合間にも自分たちで現地に足を運んで、祭り見学や農作業のお手伝い、合宿など、メンバー自身がまず高知を知ろうという意識のもと活動しています。

今後も地域と学生がつながるきっかけづくりを目指し、今までのつながりをさらに深めるとともに新しいつながりをつくっていきたいと考えています。

アピールポイント

活動を通じて、いろんな「高知」を満喫できます！

総合教育センター　准教授　大槻知史

山の食、川の暮らし、海の恵み、人のつながり…日本でもトップクラスのド田舎な高知は、日本でもトップクラスな魅力の宝庫でもあります。大学から高知に来た人、高知県出身だけど、地元をあまりよく知らない人、地域と学生をつなぐこの団体に参加したら、いろんな「高知」とお知り合いになれますよー。

”高知大学を楽しむためのトッピング”情報を発信

▶ ちょっとオイシイ高知大ライフJam Boshipan

▶ 活動概要

こんにちは、Boshipanです。『ちょっとオイシイ高知大ライフ Jam』を製作しています。季刊で発行しており、春と秋に発行している『Jam』（B5サイズ、28ページ）と、夏と冬に発行している『mini Jam』（A3サイズの1枚の紙を折りたたんだ小冊子）があります。どちらもオールカラーで、『Jam』は3000部、『mini Jam』は1500部を毎回発行しています。これらを年4回発行することが主な活動となります。部員は世代交代を経て9名（ライター3名、デザイナー5名、カメラマン1名）で活動しています。

わたしたちの活動理念は、最初に書いたように「ちょっとオイシイ」高知大ライフのために、学生に寄りそう「高知大を楽しむためのトッピング」を提供することです。私達はこの活動を通して喜びや充実感を感じています。私たちがBoshipanの活動をすることによって大学生活を楽しいと感じているように、モヤモヤしている大学生活をどうにかしたい人、楽しみを求めているが見つけられない人に、そう感じられること・ものを提供したいから私たちはこの活動を行っています。

地道な配布活動が実を結び、学内周知度も90%を超えました！

Boshipanが企画・運営した「ミス高知大コンテスト」も大成功に終わりました！

▶ 今年度の活動

『Jam』は2012年春号でvol.10という大台に突入します。今まで長い年月をかけ、今では高知大朝倉キャンパスでの周知率は90%を超しました。2011年はその高い周知率をより学生の活気に結びつけるために、七夕の時期に学生会館に笹と短冊を設置したり、黒潮祭で「ミス高知大コンテスト」を開催しました（入場者数700人を上回り、大盛況に終わりました）。その他高知県知事選挙投票啓発冊子の作成（高知県選挙管理委員会、高知広告センター、リーブルとの合同企画）にも関わりました。もちろん本業であるJamの方も滞りなく発行しました。

▶ これからの活動

Boshipanは製作活動に加えてより読者と近くなれる冊子を目指しています。そのために私達が作る記事に以下のことを心がけてこれからの活動を続けたいと思います。まず、高知大生にとって役に立つ記事であってほしいということ。学生たちの知らない楽しいこと（遊び以外）を投げかけることです。そしてその記事は面白いを越えていなければなりません。面白く、役立つ情報誌Jamを手元に残してもらうことを目標としたいです。そして、周知率を生かしBoshipanらしいイベントで読者とコミュニケーションを取り、より近づいていこうと思います。そのために「私たちから行動する」という姿勢を貫いていこうと思います。

応援メッセージ

**学生目線の情報発信！
今や高知大学にとって
なくてはならない存在に。**

人文学部 准教授 高橋 俊

「Boshipan」は、長い間活動を継続させているS･O･Sの老舗団体です。『Jam』の発行を通して、高知大学生にとって役立つ情報を発信し続けてくれています。
私も昔からの愛読者の一人。高知大の「いま」を知るには欠かせない団体だと思っています。

高知大学の学生活動の情報を一元化!

▶ 学生活動支援　さぽると

▶ 活動目的

この団体の発足理由には、高知大学内の学生団体は各々に活動をしており、団体同士の交流や連携、情報交換などがなされていない、という現状があり、その原因の一つに、学内の団体数や理念をしっかり把握している場所がないという問題に行き着きました。また、個人や団体からイベントやセミナー情報を送るのがこれまでの手段だが、それでは非効率であり広がりにも限界があると感じました。そこで「さぽると」では情報の一元化が必要と考え、そのための活動を行っています。

メンバーは、２回生２名、１回生１名による、全３名で行ってきました。前年度までの構成人数より大幅に減ってしまったために、システム維持、ＭＬ配信、等の活動にも個人の負担が大きくなってしまいました。

さぽると説明会の様子

「さぽると」の由来
サポート＋ポルトゥス（ラテン語の港）
をあわせたものです。
情報のあつまる港をイメージして
名付けました

HPアドレス
http://saporuto.kuronowish.com/index.html

▶ 今年度の活動

グループウェアへの参入計画

目的：学生側から大学へその活動を認知してもらうための仲介機構として「さぽると」の存在を定義する。それによって、大学の学生への支援を容易にし、学生側も、大学側の情報を得る手掛かりとなりやすい。
（グループウェアの認知度・利用率の向上につなげる）

現状：大学グループウェア技術側との交渉中であるが、なかなか交渉機会が得られないまま現在に至る。

▶ これからの活動

メンバーの減少のため存続が困難になり、活動自体も「さぽると」だけの話ではないため難しくなっています。そのため、S・O・Sとしての活動にはいったん区切りをつけ、一学生団体としてその存続を決めていこうと思います。来年度以降解決すべき問題としてはメンバーの確保と団体把握のためのマニュアルの確定、大学側との交渉手段を代表のみに任せずきちんとメンバー間で共有すること、です。

▶ 最後に

今年度は、今までの「さぽると」のあり方について大きく変容を遂げました。具体的には、前年度までは団体把握のマニュアル作りとＭＬ（メーリングリスト）に特化した存在としてあろうとしましたが、今年度は実際の団体把握に至るまでの困難（メンバー減少、活動自体の停滞）のために、「さぽると」をグループウェア参入によって大学とコラボ化した存在になれないか考えてきました。一応ここでS・O・Sとしての活動に区切りはつけますが、活動計画の章で述べたとおり、学生側と大学側の相互の意思疎通のための機構として、「さぽると」の存在は大きな意義のある活動であったといえるでしょう。

応援メッセージ

学生同士を結ぶ、
学生と大学を結ぶ…
「さぽると」の活動こそ、今の時代に
必要とされている。

人文学部　教授　上田健作

「さぽると」は、これまで高知大学生の様々な活動を繋いでいく取り組みを行ってきました。このグループの掲げた目標は、的を得ているもので、時代の要請にも答えるとても大切なものだと思っています。3.11以降、「絆」の重要性があらためて強調されているように。現在、「さぽると」は組織的な困難を抱えているようですが、できれば今一度の奮起を願ってやみません。

レクリエーションを通じて高齢者のQOL向上を目指す

▶ 高知長寿いきいきプロジェクト 百遊会

▶ 活動目的

百遊会は香美市香北町の『元気な』高齢者たちのレクリエーションの会で、私たち高知大学の学生は会の運営や進行のお手伝いをしています。毎月1回、日曜日を活動日として、ペタンク、映画鑑賞会、お花見、観光などの活動をしています。現在は高齢者14人、学生12人が参加していて、毎月の活動は毎回学生3～5人と高齢者たちで行います。

百遊会の目的として、

●高齢者のQOL向上、ひきこもり防止

●生き生きと長生きする秘訣を探る

●学生のコミュニケーション能力、グループ運営能力を鍛える

などがあります。平均年齢およそ80代後半、一番上は94歳（!）という、元気で個性豊かな高齢者たちとのレクリエーション活動で、高齢者が楽しむだけでなく自分たちも楽しく鍛えられています。

安芸市観光。岩崎弥太郎邸前で

クリスマス会

▶ 今年度の活動

平成23年度には、お花見、屋外ペタンク、七夕会、高知駅観光、安芸市観光、クリスマス会などの活動を行いました。クリスマス会や七夕会のような室内での活動では、保健福祉センター香北や岡豊キャンパス看護学科棟を利用しています。活動内容は季節や気候、前後の活動とのバランス等を考えながら、高齢者が中心となって決めています。

毎月の活動は、大学のマイクロバスで高齢者を迎えにいくところから始まります。朝8時半ごろに岡豊キャンパスを出発し、バスで高齢者の自宅近くまで迎えにいきます。全員集まったら朝の会をして、その日の活動内容の確認や新しい参加者の自己紹介をします。それから正午ごろまで観光やクリスマス会などの活動を行い、昼食後に終わりの会をします。この終わりの会で次回の活動内容を話し合います。観光や野外活動のときはバスの中で行います。終わりの会と片付けが済んだらバスで高齢者を自宅近くまで送り届け、岡豊キャンパスに帰ってきます。

百遊会は、「高齢者が中心となって、積極的に参加する」ことを大切にしています。例えば活動内容を高齢者が決めるだけでなく、室内活動で使う机や椅子の準備や片付け等も、学生だけでなく高齢者と協力して進めるようにしています。こちらが用意した活動をただこなすだけ、ただ眺めるだけの受け身のレクリエーションではなく、高齢者が自ら参加出来る活動を心がけています。

一方的な受け身のレクリエーションとは違い、百遊会は学生と高齢者が一緒に活動して一緒に楽しむことが出来ます。これを読んでくれた貴方も、一緒に楽しんでみませんか？

応援メッセージ

自分も楽しみながら、お年寄りの厚い信頼も得ることができる。やりがいがたっぷりの百遊会です。

医学部 准教授 戸田由美子

行年々学生さんが減少傾向で今年度は新入生が入らず、医学科･看護学科合わせて10人となり、個々の学生さんへの負担も大きくなりました。しかし、学生さんたちは慣れてきたこともあり、非常にてきぱきと毎回の活動をお年寄りのペースで楽しんでやれています。お年寄りの心身両面のフォローもでき、信頼も厚く安心してまかせていただいています。

七夕会の様子

安全な高知を子どもたちのために・・・小学校区でパトロール活動を実施

▶ 高知子ども守り隊　守るんジャー

▶ 活動目的

守るんジャーの活動目標は、「Safe Kochi for Children ― 安全な高知を子どもたちのために」を合言葉に、犯罪や事故の起こりやすい場所に隊員を配置し、パトロールしながら、学校・地域・警察と連携して子どもたちの安全を確保するということです。

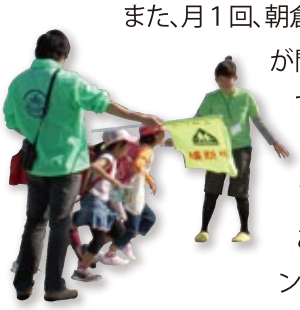
▶ 今年度の活動

普段の活動では、朝倉小学校と朝倉第二小学校で、子どもたちが安全に下校できるように交通ルールの指導や防犯のためのパトロールを行っています。車通りの多い場所では旗を持って横断歩道に立ち子どもが安全に渡れるよう誘導をしています。また、通学路を子どもたちと共に歩いて、安全に家まで帰れるように指導したり、一緒に帰る子どもがいないときは地域の安全のためにパトロール活動を行なったりしています。パトロール中には地域の方々に積極的に挨拶をすることで、守るんジャーの存在や活動をアピールしています。活動が外に認知されることで少しでも犯罪の抑止になると思います。

守るんジャーでは、月に一回マモサミという全体会を行っています。マモサミでは活動予定や行事予定を確認しています。また、隊員同士の情報交換や交流の場でもあります。

その他の活動では、8月20日に行われた針木の夏祭りに参加しました。守るんジャーは、子どもたちと輪ゴム鉄砲とシャボン玉を行い、夜には花火の準備と打ち上げをしました。他には、椅子の準備などの会場設営の手伝いもしました。子どもや地域の方とたくさん交流することができました。

12月11日には、朝倉第二校区のクリーン作戦に参加し、地域の方や子どもたちと清掃活動を行うことで地域の方々との交流を深めました。



また、月１回、朝倉地区の子ども会や青少協の方々、市役所の方などが開いている「町づくりの会」に参加しています。ここで、月毎の地域の行事を確認して守るんジャーとして参加出来る行事には、積極的に参加するようにしています。例えば、地域の方々とのふれあいの場である「ふれあいサロン」や、アジロ山の自然体験イベントのお手伝いをしたりしています。

下校時のサポート活動

小学校からも感謝状をいただきました！

一言コメント

2010年度にはSYDボランティア奨励賞「文部科学大臣賞」受賞！

教育学部　教授　小島郷子

「守るんジャー」は大学近隣の小学校児童が安心して下校できるようにパトロール活動を行っていますが、現在は、パトロールのみならず通学路の清掃活動など、地域の一員としての活動も行っています。2010年度には第5回SYDボランティア奨励賞「文部科学大臣賞」を受賞し、これまでの活動を評価していただきました。結成10周年をめざして、無事故で活動が続けられることを期待しています。

高知大学で学びたいすべての学生のために

総合教育センター修学支援部門の取り組み

2011年度に新しい体制となった高知大学総合教育センター修学支援部門は、部門長1名、専任教員１名、兼任教員4名、学生支援課により組織化されています。修学支援部門では、「高知大学で学びたいすべての学生のために」をキャッチフレーズに、誰もが学びの楽しさ、喜びを感じるキャンパスづくりをめざしています。

現在、修学支援部門で取り組んでいる重点的な項目は ①正課外活動支援、② 障害学生支援、③ 学生相談体制の充実の3点です。

1 正課外活動支援について

高知大学には多くの体育系・文化系のサークルあり、学生たちは日々活発に活動を行っています。その他にも、授業やボランティアを通じて、新しい活動に挑戦したり、「何かをしたい」と活動を創造しようとする学生たちもいます。このような学生たちに対して、学生の主体的な学びを正課外活動として定着させていくために、総合教育センターの他部門や「リエゾンオフィス　コラボレーション・サポート・パーク（通称　コラパ～）」と連携しながら、S・O・S認定団体支援を行っています。また、2011年度は東日本大震災後に災害ボランティア活動を行った学生を集中的に支援し、将来的には「ボランティアセンター」を設置すべくセミナーを開催するなど学生の人材育成および環境整備を図りました。

2 障害学生支援について

身体の障害あるいは発達障害のある学生の在籍数が増加傾向にあります。各学部が抱える問題や課題を整理しながら、障害のある学生をサポートする学生チューターの育成や、教職員への啓発活動を行っています。保健管理センターとも連携して、発達障害のある学生の修学支援や就職支援について取り組んでいます。

3 学生相談体制の充実

高知大学にはアドバイザー教員制度があります。アドバイザー教員は、アドバイジー（学生）が学生生活を送るうえでの困りごとや、進学・就職のことなどに対する相談相手です。各学部で特徴のあるアドバイザー教員制度を整えていますが、その機能充実に向けて全学的な立場から検討を重ねています。

学生支援課には「なんでも相談窓口」があり、保健管理センターでは「こころの相談室」としてメンタル面の相談も受け付けています。

このような活動に加えて、修学に役立つ情報や学生活動のエッセンスをまとめた「修学支援部門のかべしんぶん」を毎月5日に発行し、3つのキャンパス内で学生の目に触れるところに掲示をしています。また、学生支援課内には「修学支援文庫」として修学支援部門の活動に有用な図書を揃えており、誰にでも貸し出しできるよう公開しています。

「修学支援部門のかべしんぶん」とボランティア講座のチラシ

▶ S·O·S認定活動についてのお問い合わせ　各団体へのお問い合わせはこちら

高知大学 学務部 学生支援課

〒780-8520　高知市曙町2丁目5番1号　　電話 088-844-8325

E-mail：gs07@kochi-u.ac.jp